月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.14



エリィさん人生最大のピンチ!
小説　英雄伝説　零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

啄木鳥しんき
イラストメッセージ

未来からあの息子がやってきた!
みんな集まれ! ファルコム学園

ティオのファルコムラジオ
めんどくさいです…
でもがんばりますの舞台裏

英雄伝説 零の軌跡 Evolution
情報課通信

Falcom FanArt Collection

ファルコム jdk バンド
ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

あの『ブランディッシュ』が漫画で登場!? ▶AIKYOU

『ネバギバ☆ドーラ』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～



著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶

第2話 『エリィと仔猫の内緒話』

しとしとと雨が降っている。

深夜に落ちはじめた灰色の雫は、翌日の昼を過ぎても止む気配さえない。

今日は急ぎの支援要請もないので、ロイドは特務支援課の会議スペースで書類を広げていた。

そこへ、エリィがやってくる。

「おつかれさま、ロイド。紅茶をいれたわ」

「ああ、ありがとう」

置かれたふたつの白いティーカップには琥珀色が揺れ、ほのかに湯気があがっている。

エリィが隣の席に腰掛けた。パールグレイの長い髪をかきあげ、自分のぶんのティーカップを傾ける。

ついロイドは見とれてしまう。

知的な眼差しと均整の取れたスタイル。上品な美貌と、落ち着いた雰囲気……まるで美術館の絵画のように完成されていた。

特務支援課で同僚になってからしばらく経つが、いまだに彼女とふたりきりになると緊張することがある。

エリィは同い年とは思えないほど大人びて、美しい少女だった。

「これは《黒の競売会（シュヴァルツオークション）》の報告書かしら？」

「え？　あ、うん……いろいろあったから、セルゲイ課長に報告するにしても説明することが多くなっちゃってさ」

「たしかに、たくさんの事があったものね」

「思い出してみると自分でも驚くよ。変装までして乗り込んだなんて」

「ロイドのフォーマルな格好、なかなか似合ってたわよ？」



「か、からかわないでくれよ」

「うふふ……」

　エリィの白い指が書類のうえで円を描く。

「ここには会場内の見取り図を入れるのかしら？　よかったら手伝うわ」

「俺は助かるけど……エリィだって忙しいんじゃないのか？」

「急ぎの用事はないから平気」

「そうなのか？　ありがとう、エリィ」

「な、仲間だもの、助け合うのは当然でしょう？　むしろ、最初から頼んでくれていいのに」

　彼女は照れたように視線を手元に落とした。

　エリィはクロスベル市長の孫娘であり、政界に進むために高い学識を身につけている。今は、理由あって警察に身を置いているが。

「エリィがいてくれてよかったよ」

「あら、こんなときだけ？」

「そんな意味じゃないさ……エリィにはいつも助けてもらってる。エリィがいてくれたから、ここまでやってこれたんだ。これからもずっと一緒にいて、助けてほしい」

「え………それって……」

　エリィの顔が耳まで赤くなっていった。

「書類の作成だけじゃなく、捜査のときや、魔獣との戦いのときにも、すごく助かってる。エリィのオーラレインがなかったら、なんど全滅しているか――」

「……はぁ……まったくこの人は……」

　頬を染めた彼女が、がっくりと肩を落とした。

　ロイドは首を傾げる。

「ん？　どうかしたのか、エリィ？」

「……どうせ、そんな話だろうと思ったわよ。はぁ……早く書類を片づけてしまいましょう」

「あ、ああ……？」

　そんなことをやっていたら、玄関扉が勢いよく開かれた。

　元気のいい声があがる。

「ロイドー！　ネコさーん！」

「ん？」

　大声をあげながら会議スペースに走ってきたのは、幼い女の子――キーアだった。なんと、ずぶ濡れで。

　衣服は肌にはりつくほど水を吸い、ライムグリーンの髪からは、ぽたぽたと雫が落ちている。

　ロイドとエリィは、あわてて立ち上がった。

「キーア、どうしたんだ⁉　傘は⁉」

「風邪ひいちゃうわ！　タオルを取ってくるわね」

「みゃ～う」

　とキーアが鳴いた。いや、キーアの抱きかかえているものが。

　駆け寄ったロイドに、ぬっと突き出されたのは――濡れてネズミみたいに細身になった仔猫だった。

「んとね、迷子なんだって」

　キーアが答える。濡れた髪や衣服をエリィにタオルで拭かれながら。

「にゃおーん」

　まるで会話しているかのように仔猫が鳴いた。

　実際、キーアは動物の言葉が、かなり正確に理解できる不思議な力を持っている。

　ロイドたちと出会った経緯も不可解だったし、名前以外の記憶を失ってもいる。なにかと謎の多い子だった。

　それはともかく――

「迷子の仔猫か」

　どうしたものか、とロイドは首をひねる。

　耳から尻尾の先までずぶ濡れだった仔猫だが、今はエリィが用意したタオルにくるまっていた。

「みゃ～う」

　さかんに仔猫が鳴きはじめる。

「なんだろう？」

「まだ寒いのかしら？」

　ロイドとエリィは戸惑ってしまう。

　ふんふん、とキーアが仔猫の声を聞いてうなずいた。

「んとね……お腹すいたんだって」

「ああ、なるほど。今、サモーナとタイタンしかないけど、それでいいのかな？」

　ちょっと前に釣りあげた魚の名を挙げる。釣りはロイドの数少ない趣味のひとつだった。

　う～ん、とエリィが小首をかしげる。

「仔猫には大きすぎないかしら？　食いしん坊なコッペにならいいでしょうけれど」

　コッペというのは、この特務支援課のビルに住みついている黒猫だ。

　ロイドが釣ってきた魚をあげると喜んでくれる。

「たしかに、仔猫には大物すぎるか」

　にゃ～にゃ～と仔猫が鳴いていると、また玄関が開いた。傘をたたみながら小柄な少女が入ってくる。

「ただいま戻りました……今、猫の鳴き声がしませんでしたか？」

　帰ってきたのは、ライトブルーの髪の少女――ティオだった。

その後ろに、大柄な赤毛の青年――ランディもいる。
「よお、なに集まってんだ？」
「お帰り、ティオ、ランディ……さっき、キーアが仔猫を拾ってきたんだ。迷子らしい」
「仔猫……ですか」
「こんな雨の日に迷子になるなんざ、ついてねぇな」
「お腹を空かせてるみたいなんだけど……サモーナだと大きすぎるよな？」
「温かくしたミルクがいいかと」
「ああ、なるほど」
「すぐ用意するわね」
　台所に向かうエリィに、ランディが声をかける。
「その後でいいから、俺たちの飯も頼むぜ？」
「ええ、忘れてないわよ」
　ロイドの袖口を、くいくいとキーアが引っぱった。
「ん？　どうしたんだ？」
「ねえ、ロイド……ねこさん飼っちゃだめ？　めーわく？」
　じっとキーアが見つめてくる。
　不安と期待の入り交じった表情をしていた。
「もともと、コッペも住んでるわけだし、迷惑ってことはないけど……ちゃんと世話できるか？」
「うん！」
「よし、それなら後で課長にも言っておくよ。迷子ってことなら、元の飼い主が見つかるまで預かっておいたほうがいいだろうし」
「やった～!!」
「わたしもお手伝いします、キーア」
「ありがとー、ティオ！」
「任せてください。キーアが喜んでくれるのなら、不眠不休でもへっちゃらです」
「うーん、仔猫のためにティオが倒れないでくれよ……？」
　ロイドとしては、仔猫やキーアだけでなくティオのことも心配してしまう。
　やれやれ、とランディが雑誌を片手にソファへ体を沈めた。
「まぁ、がんばれよ」
　その顔をキーアがのぞきこむ。
「ランディは、ねこさんキライ？」
「べつに嫌いじゃねえさ、キー坊。でもな、俺は仔猫ちゃんのお世話をするのは、ベッドの上だけって決めてるんだ」
「ふーん、いっしょに寝てあげるんだね！」
「そうそう」
「ランディさん……最低です」
　ティオにジト目で睨まれて、ランディが雑誌に視線を落として逃げた。

　ふぇ……とキーアがアゴを上げる。
「……ふぇくしょん！」
「うわ!?」
　顔を寄せられていたランディがのけぞった。
　キーアが鼻をすする。
　ロイドはハンカチを手にして膝をつくと、鼻をぬぐってやった。
「大丈夫か、キーア？」
「う、ん……ぐしゅ……」
　ティオが床に落とされたタオルを拾いながら、キーアの服に触れる。
「タオルで拭いただけでは乾かないようですね。風邪をひいてしまうかもしれません。キーア、その濡れた服を着替えましょう」
「わかった！」
　言うが早いか、上着をつかんでまくりあげる。
　白くて細いお腹があらわになった。
「キ、キーア、まだ早いです。脱ぐのは着替えを用意してからです」
「ああ、そっかー」
「こっちに来てください。体が冷えているので、シャワーを浴びましょう」
「うん！」
　ティオがキーアを連れていく。
　ロイドとランディは、小さくため息をついた。
「本当に女性陣がいてくれて、助かるよ」
「まったくだ」

　エリィが人肌に温めたミルクを用意してくれ、仔猫は一心不乱に舌を動かす。
　前足を皿の中に入れてしまうほどの勢いだった。
　ちょっと驚いた様子でエリィが見つめる。
「とってもお腹が空いてたみたいね」
「空腹のときに食べた物の味は、格別だからね」
「ロイドにも、そんな経験があるの？」
「ああ、警察学校のサバイバル訓練のときに……動けなくなるほど空腹になったんだ。ようやく食べられたときは、ごく普通の保存食が、それはもう涙が出るほど美味しく感じられたな」
「そ、それは大変だったわね」
　仔猫の食事が終わる頃、シャワーを浴びて着替えたキーアとティオが戻ってきた。

「あったまってきたよー!!」
「お待たせしました」
ロイドとエリィとランディが応じる。
支援課のビルには、この五人と、セルゲイ課長と、コッペという黒猫がいて——
そして、もう一匹。
ぬっ、と姿を現した。
「…………………グルル」
それは大型の白狼だった。ティオやキーアなら背に乗れてしまいそうなほど大きい。
ツァイトという。
この土地の伝承にある神狼そっくりの、風格と威厳に満ちた狼である。その迫力は軍用犬が恐れをなしてひれ伏すほどだった。
迷子の仔猫と目が合う。
小さな双眸に映りこむ伝説の白狼。
仔猫、固まった。
ガクガクガク、と震えはじめる。
「フゥ～～～～～～～～～～～～～～～～～～!?」
「……ガウ？」
「だ、大丈夫だからな！」
ロイドは仔猫を抱き上げた。
両腕の中に隠してやり、ツァイトが視界に入らないようにしてやる。
同時にティオが、指導に入った。彼女もキーアと同じように動物と会話ができる。
「ツァイト、小さい動物というのは、あまり恐がりすぎると体調を崩したり、死んでしまうこともあるそうです」
「ガゥ」
「そうですか、知っていますか。では、小さな仔猫がツァイトを見て怖がることも理解できますね？」
「ガオゥ、グルゥゥ」
「そうですね、街で暮らしている仔猫ですから、大きな動物を見慣れていないようです」
「……ガゥ」
「はい。そういうことなので、しばらくは、自重してください」
「グルゥ……ゥゥゥ……」
流れるような毛並みの尻尾が、へたりと垂れ落ちた。ふ～と鼻息をもらし、ツァイトが部屋から出て行く。
大きな体が、心なしか小さく見えた。
エリィが肩をすくめる。
「かわいそうな気もするけれど……仕方ないわよね。とっても怯えちゃってたもの」
「そうだな」

ロイドも同感だった。
キーアが仔猫のことをのぞきこむ。
「だいじょうぶ？」
「ああ、もう落ち着いたみたいだ」
仔猫は空腹と緊張から解放され、満腹感もあってか、うとうとしはじめていた。
ロイドの腕に体を預け、目を閉じる。
「わ～、赤ちゃんみたいだね！」
「たしかに、似てるかもしれないな」
「ねー？　ロイドは、結婚したら赤ちゃんほしい？」
キーアが無垢な瞳で見つめてくる。ピクッとエリィとティオが反応した。
じっと三人の視線が集まる。
当のロイドは弱り顔だ。
「子どもか……考えたこともないけど……」
「ほしくないの？　ロイドは、子どももキライ？」
「いや、子どもは好きだよ。そうだなぁ……たぶん結婚したら欲しいと思うだろうな」
エリィとティオが頬を朱に染めた。
「そ、そうよね、結婚したら子どもは欲しいわよね……」
「ロイドさん、子どもが好きなんですね」
「えへへ……そっか。キーアも赤ちゃんほしいな！」
にっこりとキーアが笑みを浮かべる。
ぽん、とランディが頭をなでた。
「ほ～う、でもよ、キー坊は赤ちゃんの作り方なんて知ってんのか？」
「キーアは知らないけど……ランディは知ってるの!?」
「当然だろ～」
「教えて！　教えて！」
「よしよし、このランディさんにまっかせなさい！　いいか、赤ちゃんってのはな、大人の男と女にしか作れないんだぞ」
「へー、大人……じゃあ、ランディとエリィならできる!?」
「そりゃ、もちろん。たぶんな」
「ふぇ～……どうやって作るの？」
「俺とお嬢がか？　まぁ、誰でも似たようなもんだが、まずはベッドのうえで——」
ふふふふふ……と凍えるような笑みをこぼして、エリィがランディの肩をつかんだ。
「なにを話しているのかしら？」
「え？　い、いや、ちょっとばかし社会の勉強を……いや、生物のほうかな？」
「ふふふ……まだ子どものキーアちゃんに、まさか妙なこと教える気じゃないでしょうね？」
「ランディさんこそ道徳の授業が必要かと」

ティオが手厳しい。
　しかし、彼は悪びれずに返す。
「いや、俺は、赤ちゃんが欲しいというキー坊の将来のためにだな――」
「まったく、ランディは……子どもに子どもの作り方を教えないでちょうだい」
「キーア、学ぶべきタイミングを間違えると、こういう悪い大人になってしまいます」
「ふぇ～？　ランディ、悪いオトナなの？」
「うっ……」
「そうよ～、悪いことしたら謝らないとね」
「はい、その通りです」
「じー」
　エリィとティオとキーアに見つめられて、ランディは白旗をあげた。
「ううぅ……しーません」
「よろしい」
「反省してください」
「あはは……」
　やれやれ、と見ていたロイドは肩をすくめる。
「とにかく……そろそろ、夕飯にしよう」
　その提案に、みんなが賛成した。

　セルゲイ課長が戻ってきてから遅めの夕飯を取って、そろそろ明日に備えて眠ろうか、という時間――
　仔猫はタオルにくるまって眠っていた。
　ところが、くしゅん、と小さなくしゃみをした。
「あら？　もしかして風邪をひいてしまったのかしら？」
　エリィが不安そうにする。
　ティオが仔猫の様子を確かめた。
「……体温は正常です。しかし、体力を消耗しているので、温かくして寝たほうがいいかと」
「なるほど」
　どうしたものか、とロイドは考えこむ。
　キーアが仔猫を抱きあげた。
「んじゃね、キーアがいっしょに寝る！　ロイドもいっしょに寝よ。いいでしょ？」
「え？　キーアの部屋で？」
「うん！」
「そうだな……それしかないか」
　一階にはツァイトがいるし、弱っている仔猫をコッペのように屋上で寝かせるのは無理がある。キーアの部屋なら安心

だろう。
　ロイドが承諾すると、ティオがジト目になった。
「仔猫とキーアを独り占めですか、ロイドさん……あんまりです」
「そうよ、ずるいわ」
「エリィまで!?　じゃあ、やめておこうか？」
「ダメよ。風邪をひいたらどうするの!?」
「ど、どうしろと……」
「じゃあみんなで一緒に寝よー！」
　キーアの言葉に、その場が凍りつく。
　様々な思惑が錯綜しかけたが、「そんな大きなベッドはないから、無理だよ」というロイドのツッコミにより提案は却下された。
　セルゲイ課長があくび混じりに言う。
「ロイド、しばらくはキーアと一緒に仔猫の面倒も見てやれ」
「あ、はい」
「キーア、いっしょにめんどう見る！」
　おそらく、セルゲイ課長は〝キーアと仔猫、両方の面倒を見てやれ〟と言ったのだろうけれど。
　いずれにしてもそういうことになった。

　三日が過ぎて――
　結局、仔猫はキーアの部屋で飼うことになった。
　最初に寝かせたベッドを〝自分の寝床〟と覚えてしまったらしく、他に場所を作ってあげても、キーアの部屋の前で待つようになってしまったからだ。
　仔猫の世話をするために、ロイドやティオも出入りするので、まるで共有スペースのような感じになっていた。
　早朝、そんな猫部屋と化した３０４号室に顔を出すと、珍しいことに仔猫しかいなかった。
「あれ？　キーアはどこにいったんだ？」
　ロイドは首を傾げる。
　ふんふんふ～ん♪　と鼻唄交りでキーアが戻ってきた。
　手には《霜降りヒレ肉》を持っている。
「はい、シロカゲ！　あ～ん」
　シロカゲというのは、キーアが命名した仔猫の名前だ。
　みっしぃと並んで人気キャラクターである《カゲマル》にあやかったらしい。
「にゃ……にゃ……にゃぁお～～ん」
　そのシロカゲが目を白黒させて後ずさる。

差し出された肉のほうが、仔猫の体よりも大きかった。

「キーア、そんな大きな肉じゃ、シロカゲは食べられないと思うぞ？」

「ツァイトは美味しいって言ってたよ？」

「うーん、ツァイトは食べられるだろうけど……もうミルクはないのか？」

「うん。切れてるみたい」

「そうか……いつもより減るのが早くなるものな。それじゃ、今から一緒に買いに行くか」

「やったー!!」

ロイドはキーアを連れて出かけることにした。

手早く外出の支度をさせる。

階段を降りた。

ちょうど朝食の準備をしていたエリィが声をかけてくる。

「あら、お散歩なの？」

「ミルクが切れたみたいだから、キーアと買ってくるよ」

「もうすぐ朝食だけれど……後にしたら？」

「モルジュに行くだけだから、すぐ戻れると思う。朝食の後は支援要請を受けたいし」

「そうね……なら、焼きたてのパンもお願い」

「了解」

「やったー、焼きたてパン！」

はしゃぐキーアの手を引いて、ロイドはベーカリーカフェ《モルジュ》へ向かった。

西通り――

支援課ビルを裏手側から出てすぐ、パラソルテーブルのならぶオープンカフェがある。煉瓦の建物からはパンを焼く香ばしい薫りがただよってきていた。

店内に入る。

パン職人のオスカーが笑顔を見せた。

「おう、よく来たな！」

「おはよう、寄らせてもらったよ」

オスカーはロイドの幼馴染みで、店主のモルジュの弟子だ。

最近は新聞（クロスベルタイムズ）で紹介されるほどの腕前だとか。

「おはよー、オスカー!!」

「キーアちゃんも買い物を手伝ってるのか。偉いな」

「えへへ、オスカー、ミルクちょうだい！」

「おう、アルモリカ村から入荷したばかりの新鮮ミルクがあるぞ」

ロイドは商品棚を見る。

「えっと……焼きたてパンだと……これかな？」

「焼きたてなのは、それと、これ。今日も新作パンがあるぜ。試しに食べてみてくれよ」

「いいのか？ ありがとう、オスカー。頂かせてもらうよ」

そこへ、エプロン姿の少女が、カウンター裏にある厨房からトレーに焼きたてのパンを乗せてやってきた。

「はい、これ、焼きあがったばかりのクロワッサン」

モルジュの娘、ベネットだ。

ちらちらとオスカーのほうを気にしている。

ベネットは彼をライバル視してパン作りに励んでいるのだけれども……その当人にはまるで意識されていないという、ちょっと不憫な子だった。

「ちょうどいいタイミングだったな。ベネットの作るパンも最高に美味いんだぜ」

晴れた空のような笑みを浮かべて賞賛するオスカーの言葉に、ベネットがそっぽを向いて顔を赤らめる。

「と、当然じゃないの……」

ロイドは苦笑しつつトレーにならんだクロワッサンを取った。

「うん、たしかに美味しそうだ。それじゃあ、これも頂こうかな」

「あ、ありがとう」

ぺこり、とベネットが頭を下げた。

ロイドがオスカーと会計をしているとき――

ねえねえ、とキーアがベネットに耳打ちする。

「あのね……」

「ん？ なあに？」

「……ロイドがね、キーアの子どもがほしいって」

「はああっ!?」

信じられないものを見るような顔したベネットに、まじまじと見つめられた。

彼女たちの会話を聞いていなかったロイドは、理由がわらず「？」を浮かべる。

店を出るときまでずっと、ベネットが戸惑った様子だった。

「ミルクの瓶、キーアが持ちたい！」

「え？ でも、階段もあるし……結構重いぞ？」

「でも持ちたいんだもん」

「うーん、よしわかった。ミルクを運ぶのはキーアに任せるよ。ただし、両手でしっかり持つこと」

「うん！」

せっかくお手伝いをする気になっているのだから、と瓶を任せる。

ロイドは気遣いつつ、ゆっくり帰ることにした。



キィ……

キーアの部屋のドアが、かすかな音をたてて開く。

廊下に人の姿はなく、部屋の中から出てくる人もいない。
もしも、誰かが見ていたなら風でも吹いたかと思っただろう。
ドアの隙間から、滑るように白色の仔猫が出てきた。
「にゃあ～～……」
シロカゲは無人の廊下を音もなく歩いていく。
たたた、と階段を降りた。
ソファのならべられた応接スペース。そこで、青と白のマフマフしたものを見つけた。
「にゃおん？」
なんだろう？　とシロカゲは好奇心を発揮して、たしっ、と爪を立てた。

「…………」
ツァイトは朝のまどろみのなかにいた。
人ならざる鋭敏な感覚は、寝ていてさえ周囲の状況を把握する。むろん仔猫が近づいていることも察知していたが、どうせ気づいて逃げていくだろうと高をくくっていた。
しかし、どうやら身じろぎもしなかったせいで、ツァイトを置物かなにかと勘違いしたようだ。
だらんと床に伸ばしていた尻尾に、爪を立てられた。
なんの痛痒もない。
たとえ刃物や銃器であっても、己が傷つけられることなどないとツァイトは知っている。
あるいは、最強と名高い遊撃士――風の剣聖とやらであればわからないが。
たしっ、たしっ、と仔猫が尻尾を叩く。
毛の一本とて痛みはしないが、心地よい時間を邪魔されて、口の端が歪んだ。
重火器すら砕き散らす牙が、わずかに覗く。
どう自らの存在を知らせようか？
小さい存在に慈愛を示す白狼ではあるが、仔猫のおもちゃに甘んじるほど矜持を捨てているわけではない。
追い払う算段をしたとき、ふとティオの言葉が蘇った。
「小さい動物というのは、あまり恐がりすぎると体調を崩したり、死んでしまうこともあるそうです」
ティオやキーアが仔猫を大切にしているのは理解している。
ロイドは熱心に元の飼い主を探しているようだ。
エリィが常々仔猫の健康を気遣っているもの知っている。
そして、無関心を装いつつランディやセルゲイですら。
たとえば、今、ツァイトが立ち上がって――

爪を立てているのが巨大な狼の尻尾だったと、仔猫が気づいたら？
驚いて死ぬかもしれない。
「……ッ!!」
ツァイトは呼吸さえ止めた。
誇り高き白狼としては、仔猫殺しなどという汚名をかぶるわけにはいかなかった。
さっさと飽きてくれるのを祈るが、よほど気に入ったのか、仔猫は尻尾にじゃれついてきた。
「にやゃゃあ～～～！」
さらに、爪を立てて背中へとよじ登ってくる。
「ふに！　ふに！」
好奇心と冒険心が小躍りをしているようだ。
痛くも重くもないが、むしろ転げ落ちないか心配だったし、なにより自分に気づくのではないか、と気が気ではない。
とうとう、仔猫はツァイトの三角の耳の間へと到達した。
「にやゃゃあ～～～!!」
「…………………」
ツァイトは石化でもしたかのように全身の筋肉を硬直させていた。
しかし、仔猫がうかつにも足を滑らせる。
転げ落ちてきた。
鼻先に爪を立てられる。
「～～～ッ!?」
ツァイトは思わず鼻息を吹いてしまった。
仔猫が床に落ちる。
「ふぎゃ!?」
ひっくり返った姿勢のまま見上げた。
目が合う。
お互いに固まった。
冷や汗が背筋をつたう。ツァイトは、かつてないほどドキドキしていた。
仔猫がガクガクと震えて――
ジョ～～～～～、と絨毯のうえにアンモニア臭のするシミを広げた。
それから、おそらく仔猫にとっては全力で……ツァイトにとっては、ハラハラするほど前足と後ろ足をもつれさせながら、階段を駆け上がっていった。
「にぎゃ～～～～～!!」
「…………フゥ」
死ななくてよかった、とツァイトはため息をこぼす。
しかし、お気に入りの寝床には、すっかり仔猫の臭いをつけられてしまった。支援課の誰かが絨毯を洗うまで使い物にならないであろうことは疑いようがない。

「グルル……」
　そのとき、ロイドとキーアが支援課ビルに戻ってきた。
　ツァイトの横まできて、ふたりが立ち止まる。
「ん？　なんか臭うな……？」
「ほんとだね」
「これは……まさか……」
「あ～、ツァイトがおもらししてる～!!」
「なんだって!?」
「ガルゥ!?」
　キーアに指さされて、ロイドよりもツァイトのほうが驚いた。
　ぶんぶん、と首を左右に振る。
「ほえ？　ああ、ちがうの？」
「ガウッ！　ガウッ！」
　キーアが言葉を理解できるおかげで、えん罪は晴れたが、いたく自尊心を傷つけられたツァイトだった。

　仔猫が来てから一週間が経ち――
　ロイドたちは会議スペースとしても使っているリビングで昼食を済ませた。
　午後の支援課の活動をはじめようかと思った矢先、警察本部に出向いていたセルゲイ課長が戻ってきた。
「ロイド、ティオ、ちょっと来てくれ」
「はい」
「なんでしょうか？」
　ふたりして課長室に呼ばれた。
「エプスタイン財団のロバーツ主任から、支援要請があってな。もう導力端末にも登録されていると思うが……」
「ロバーツ主任ですか？」
「なにやら、また面倒な予感がします」
　ティオにとっては上司にあたる人物で、どうやら彼女のことを娘のように溺愛している様子なのだが、愛情表現が特殊すぎて、うまく伝わっていないらしい。
「どんな支援要請なんでしょうか？」
「それは依頼者から聞いてくれ。先方からお前たちを指名してきたんでな。知らぬ仲でもないし、なにか理由があるに違いない」
「わかりました」
「めんどくさいです」
「ティ、ティオ!?」
「わかっています。ちゃんとがんばります」
　いつにも増して平坦な口調のティオだった。

　セルゲイ課長がタバコに火をつけ、ふぅ～と紫煙をくゆらせる。
「エプスタイン財団には、なにかと世話になってるんでな。できるだけの協力はしてやれ」
「ええ、確かに。導力ネットワークのおかげで、捜査も効率的にやれていますからね」
「ま、そういうことだ」
「ティオを支援課に出向させてくれたことにも、感謝しているし」
「あ………」
　彼女の頬に微かに朱が差した。
　くるり、とティオが背を向ける。
「……ロイドさん、早く行きましょう。他の支援要請もありますし、効率的に終わらせるべきかと」
「ああ……いや、ちょっと待ってくれ」
「どうかしましたか？」
「出かけることを伝えておいたほうがいいだろうし、仔猫（シロカゲ）のことを頼んでくるよ」
　三階にある部屋を訪ねる。
　ドアを開けたエリィが表情をほころばせた。
「あら、ロイド、どうかしたの？」
「支援要請があって、今から出かけるんだ」
「そうなの？　じゃあ、すぐに準備するわね」
「あ、いや……ロバーツ主任からの指名で、俺とティオだけで行くことになった」
「えっ、そうなの……」
　エリィの表情が、すこし沈んだ。
　それだけ積極的に支援課の活動に取り組んでいるのだろうとロイドは解釈する。
「すまない……そのうえ、こんなことを頼むのは気が引けるんだけど、でも頼れるのはエリィしかいなくて」
「えっ？　あの、なんでも言って、ロイド」
「ありがとう。じゃあ、シロカゲのことを頼む。キーアも今日は他の子どもたちと出かけてるんだ」
「あ……仔猫？」
「俺もティオもキーアも留守にするし、ランディや課長に頼むわけにもいかないからな。間違って外に出てしまったり、またツァイトのところへ行ってしまわないよう見てて欲しいんだ」
　ふぅ、とエリィがうつむく。
「そうね……必要なことだと思うわ」
「頼めるかな？」
「ええ、もちろんよ。心配しないでロバーツ主任のところへ行ってきて」

「ありがとう、エリィ」

笑顔で見送ってくれた。

エリィは読みかけの本を持ってキーアの部屋を訪ねた。

ベッドで寝ていた仔猫が、「にゃお？」と鳴く。

「ん……シロカゲちゃん、いっしょにお留守番よ……」

「にゃおーん」

エリィは椅子に腰掛け、本に目を落とした。

こんなにゆっくりした時間を過ごすのはひさしぶりで、ずっと読むのを楽しみにしていた本なのだけれども――目が文字のうえを滑ってしまう。

「ふぅ……」

「にゃーご？」

気がつくとシロカゲがベッドから降りて、エリィの足下に来ていた。

首筋を脚にすり寄せてくる。

「もしかして、慰めてくれてるのかしら？」

「にゃおーん」

「……あの人は、どうして気づかないのかしらね？」

ロイドの顔を思い浮かべると、エリィの気持ちは揺れてしまう。

今までは、ひとりを寂しいなんて感じなかったのに。

支援課に来て、ほとんどの時間を四人で過ごしたせいかもしれない。

「最近、いっしょにいることが減ったわよね。

それは、細かい支援要請が増えて、全員で行かなくなったせいもあるし……

ひとりひとりのできることが増えたせいもあるし……

仕方のないことだとわかっているけれど」

「にゃぁおお～ん」

仔猫を相手に人生相談なんて意味のないことだと思うけれど、だからこそ言えることもあった。

「もうすこし、いっしょにいてくれても……

最近はティオちゃんやキーアちゃんとばかりで。

あ、もちろん、私と彼はおつき合いしているとか、そういうのではないのよ!?

だから、私といっしょにいる必要とかは、ぜんぜんないけれども！」

エリィは仔猫を相手に慌ててフォローする。その無意味さは承知しているが。

「……彼が、そういうことに関心がないのはわかってるの。

この街を守りたい……その正義感に一途な人だって、ちゃんとわかってる。

そこが、彼の魅力というか……

いいところっていうか……」

赤面してしまう。

仲のいい友だちにも、こんなことは言えないに違いない。

すっかり頬が熱くなっていた。

汗まで出てきた。

部屋の窓を開けて、外の風を入れる。

ほてった首筋に心地よかった。

「ふぅ～……」

「にゃ～～ご」

「ん……平気よ。言ってるほど思い詰めてないわ。

今も同僚としては普通に接してくれてると思うし……

たぶん、頼りにされてると思うし……

それだけでも幸せなことだわ。

でも、たまにはプライベートで誘ってくれても……」

そうしないと、不安になるでしょ――という言葉は飲みこんだ。

「にゃぁおお～ん」

ふたたび、シロカゲが脚に首筋を寄せる。

胸に溜めこんでいたものを言葉にしただけで、ずいぶんと気持ちが軽くなった気がする。

興が乗ったエリィは「ロイドってば、あのときは、こんなこと言ったのに」だとか「ここまで言ったのに気づかないなんて」だとか。

要するに〝ロイドが朴念仁で寂しい〟というようなことを延々とシロカゲに語って聞かせた。

陽が傾き――

そろそろ夕飯の支度をしようかと立ち上がる。

「ふふ……すっかり聞いてもらっちゃったわね。もっとも、猫を相手に話したところで、誰かに言われることなんて……な……い……」

さんざん洗いざらいしゃべってしまってから、エリィは、今さらになって思い出した。

ティオもキーアも動物の言葉がわかる。

「きゃあああぁぁぁ～～～～!?」

ビクッ、とシロカゲが驚いて飛び退いた。

エリィは顔を青ざめさせる。

「な、なし！ 今までの、なしね!? お願いだから、聞かなかったことにして！」

「にゃ……にゃお……？」

「ああ、私には動物の言葉なんてわからないし……」

そもそも、どこまで理解されているのか。

忘れて欲しいと頼んだところで伝わるのか。

いつものエリィならば、仲間のスキルを把握して最善手を打つのだが、すっかり油断していたと言う他はない。

泣きそうだった。

そのとき、階下からキーアの甲高い声が聞こえてくる。

「ただいまー‼」

「キーア、帰ったら手を洗わないと」

「風邪の予防は大切かと」

「はーい！」

ロイドとティオも帰ってきたようだ。

どうしたらいいか、まったく考えがまとまらない。焦っているせいだとは思うが、落ち着かなければと思えば思うほど、思考が空回りしてしまう。

「あ……うぁ……」

階段を上ってくる足音がする。

「うーん、すっかり遅くなっちゃったな」

「これほど時間がかかるとは、予想外でした」

「シロッカゲ～♪　シロッカゲ～♪」

よりによって、動物と会話ができるふたりと、ロイドがやってくるなんて。

「にゃゃゃあ～～～‼」

妙に興奮した鳴き声に、振り返る。

シロカゲが窓から身を乗り出していた。外を舞うチョウチョに前足を伸ばして。

「にゃっ！」

その身が、窓の外へと転げた。

――落ちる⁉

「だめぇぇぇ～～～～～～～～‼」

エリィは弾かれたように駆け寄ると、思い切り手を伸ばした。

シロカゲの体をつかむ。

しっかりと。

「ふにゃっ⁉」

「ほっ……」

安堵したのもつかの間、エリィ自身の体も、窓から大きく出てしまっていた。

石畳の地面が見える。

遠い。

部屋は三階だ。

この高さで、もしも頭から落ちたなら――

「い、いや……」

まだなにもできていない。

まだやりたいことがいっぱいある。

仔猫だって無事では済まない。

「た、たすけ……ロイド～～～～～～～～～‼」

「エリィーーーッ‼」

叫び声がして、ドアが砕けんばかりに開かれた。

直後、外へと落ちかけていたエリィの脚が、がっしりとつかまれる。

止まった。

「あ……」

「大丈夫か、エリィ⁉」

「ロ、ロイド……？」

「ご無事ですか、エリィさん！」

「エリィ、だいじょーぶ⁉」

ティオとキーアも声をかけてくる。

安堵したとたん、すこし涙がこぼれてきた。

「くぅ……だいじょうぶ……あげてくれるかしら？」

「あ、ああ……」

エリィは胸にシロカゲをしっかりと抱きしめて、部屋に引き戻してもらった。

安堵のあまり、エリィは床にへたりこんでしまう。

「はぁ……ありがとう、ロイド……もうダメかと思ったわ」

「ふ～、よかった」

彼のほうも、床に膝をついた。

あやういところで助けられたシロカゲをキーアが抱きしめる。

「よかったね、シロカゲ！」

「ほんとうです。エリィさんもシロカゲも無事でなによりでした」

ティオも胸をなでおろした。

申し訳なくて、エリィはうつむいてしまう。

「ごめんなさい……私が窓を開けておいて、シロカゲちゃんから目を離したばかりに……」

「いや、俺も窓を開けてたことはあるし、たまたまだと思う。それより、エリィが飛び出さなかったら助けられなかった」

「でも……」

「エリィ、シロカゲを助けてくれて、ありがとう」

「え、そんな……ロイドがいなかったら、私だって……」

「ありがとー、エリィ！」

「助けたのは事実なのですから、誇っていいのでは？」

「そう……かしら？」

「にゃーお、にゃっ、にゃっ……」

キーアの腕のなかで、シロカゲが鳴き声をあげた。

ティオとキーアが耳を傾ける。

「どうしましたか？」

「ふんふん……？」

「あ……⁉」

すっかり忘れていた。

エリィはシロカゲに秘めた想いをあらんかぎり、それこそ日が暮れるまで打ち明けてしまったのだ。

青ざめた顔に気づいて、ロイドが心配そうに声をかけてくる。

「大丈夫か、エリィ。どこか痛めたのか？」

「う、ううん……違うの……」

「でも……」

「私なら、平気よ」

ティオとキーアが、シロカゲから話を聞いている。

知られるのは、すごく恥ずかしい。

けれども、こんな形ではあっても想いが伝わるのなら、それでも――

「ううぅ……でも、やっぱり……」

「やっぱり、どこか痛いのか、エリィ？」

目を伏せるエリィに、ロイドがそわそわと落ち着かない。

話を聞き終えたティオがうなずいた。

「わかりました……そう、伝えればいいのですね？」

「くっ……」

エリィは覚悟を決めた。

わたわたと《ティアラルの薬》やら《キュリアの薬》やらを取り出しているロイドを見つめる。

「ねぇロイド、ちゃんと聞いて」

「え？」

「ちゃんと……ロイドに聞いて欲しいの」

「あ、ああ？」

覚悟を決めた。

ティオが、いつも通りの平坦な口調で――

「ええと……

〝命の恩人の秘密を漏らすほど、あっしは野暮じゃありませんや、お嬢さん、安心してくんなせえ〟

……だそうです。どういう意味でしょうか？」

「あはは、シロカゲは、ときどきわかんないこと言うよね！」

エリィは固まっていた。

――そういう性格だったの⁉　と衝撃を受けていた。

ロイドが首を傾げる。

「よくわからないけど……シロカゲは意外としっかり者みたいだな」

「あ、あはは……あははは………」

エリィは脱力のあまり、自分でもよくわからない笑い声をもらしていた。

つられるようにキーアも笑う。

ロイドとティオは、不思議そうに眺めていた。

そこに、ランディが入ってきた。

「よお、楽しそうにしてるとこ悪いけど……お客さんだぜ」

「え？　ああ、誰だろう」

「その仔猫も連れて行ったほうがいいぞ」

「ほえ？」

ランディにうながされて、キーアはシロカゲを抱いたまま一階に降りていく。

みんなが出てから、エリィは乱れていた衣服を整えて、後に続くのだった。



ロイドたちは玄関へと降りた。

来客というのは、遊撃士のリンとエオリアだった。

「おや、そいつが迷子の仔猫だね？」

「ああ！　ティオちゃん、いつ見てもかわいい！　お姉さんになでなでさせて～♥」

男勝りなのがリンで、ティオににじり寄っているのがエオリアだ。

「えっと……今日はどういった用件で？」

「この写真の猫を探してくれって、遊撃士協会（ギルド）に依頼があったんだよ」

リンが写真を取り出す。

見てみると、キーアの抱いているシロカゲそっくりの猫だった。

「元の飼い主からの依頼があったのか」

「ああ、ランディが〝支援課にいる〟って教えてくれたのさ」

リンに水を向けられると、赤毛の青年がぽりぽりと頬をかく。

「まぁ、飼い主が探してるなら遊撃士協会のほうに話が行ってるんじゃないかと思ってよ」

「ランディ、飼い主を調べてくれてたんだな」

「別にたいしたことじゃねえっての。買い物のついでに寄っただけだ」

ティオが眉をひそめて。

「それで……迷子の仔猫を探していたことと、わたしがなでられていることに関係はあるのでしょうか？」

「ん～？　ないわよ？」

ぐいぐい、とティオがエオリアを押しのける。

リンが肩をすくめた。



「いいかげんにしとかないと、嫌われるよ」
「ああん！　それはダメ！　お姉さん、泣いちゃう！」
　あちらのことは置いておいて――
　ロイドはキーアの傍らに膝をついた。
「キーア、シロカゲを……」
「うぅ～……」
　元の飼い主が見つかったといっても、キーアは別れを惜しんでいるようだ。
　こうなることは予想できたのに、自分のミスだ、とロイドは自責の念にかられる。
　そこへ、エリィが降りてきた。
「ロイド……まかせてもらっていい？」
「え？　ああ、頼む」
　エリィがキーアの前にしゃがみこむ。ゆっくりと諭すように話しはじめた。
「キーアちゃん……シロカゲちゃんの家族が見つかったのよ？　それは、うれしいことでしょう？」
「家族……」
「ええ、キーアちゃんも、ロイドや私たちと離ればなれになって、また会えるってわかったらどうかしら？」
「あ……」
　キーアがシロカゲに視線を落とした。
「うれしいね！　家族が見つかったよ、シロカゲ！」
「にゃゃゃあ～」
「えへへ！　シロカゲもうれしいって！」
　リンがうなずき、エオリアがシロカゲを受け取った。
「ばっちり、元の飼い主に届けるよ」
「またね、キーアちゃん。それと、ティオちゃんも」
　リンとエオリアが支援課ビルの玄関を出る。ランディは軽く片手をあげ、ツァイトは階段の陰から見送っていた。
　最後に、仔猫の鳴き声がした。
　扉が閉まる。
「ふふ……〝ありがとう〟……だそうです」
　ティオがつぶやく。
　笑顔で見送っていたキーアが、ぼろぼろと涙をこぼしはじめた。
　ぐっ、とエリィが抱きしめてあげる。
「えらいわよ、キーアちゃん」
「うえええぇ～～～!!」
　ロイドはそんな仲間たちを温かく見守っていた。




啄木鳥しんき
ファルコム大好き!
『イースII』基本PC88版。
イースが「静」で、イースIIは
間違いなく「動」。対比が素敵。
最後の「お別れです(ポロッ)」が
秀逸です。リリアがかわいくて
大好きな私ですが、あれを見て
「イース」のヒロインはやっぱり
フィーナなのだと思いました。


待ってたわよ アレス!!
今日こそは観念なさい!!
師匠の仇──!!
あ


名作『ブランディッシュ』がコミックで登場！
ネバギバ★ドーラ
AIKYOU

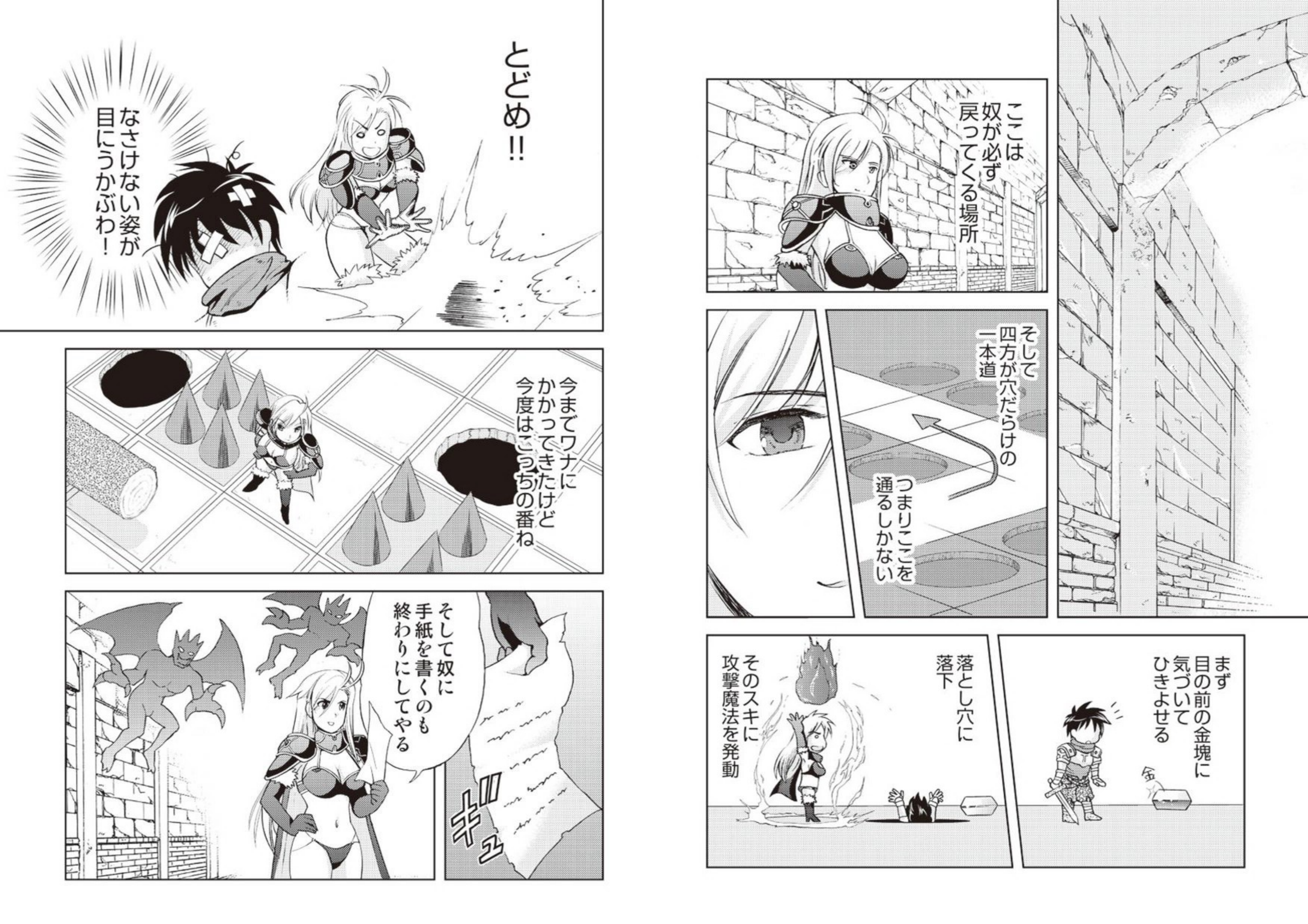

あの大悪党ー!!
ヒック・・
あんな所に落とし穴ほるなんてなんて汚いの!!
ザワ
ザワ
ずいぶん荒れてるわねー…
ーーというか勝手に穴に落ちたんじゃ…
気持ちはわかるけど息抜きしたら？
大勝ち
満たされない！


ストレス発散なら手紙がいいわ…
悪運の強い奴め！覚えてらっしゃい!!
……
それにしてもドーラってアレスのことばっかり
超がつくほど高額の賞金首だしね～
何が言いたいの!?
本当は好きなんじゃないの～～!?

人聞きの悪いこと言わないで――!!
あんな奴グズで無口で
最低なんだから!!
気分悪い!! 帰る!!

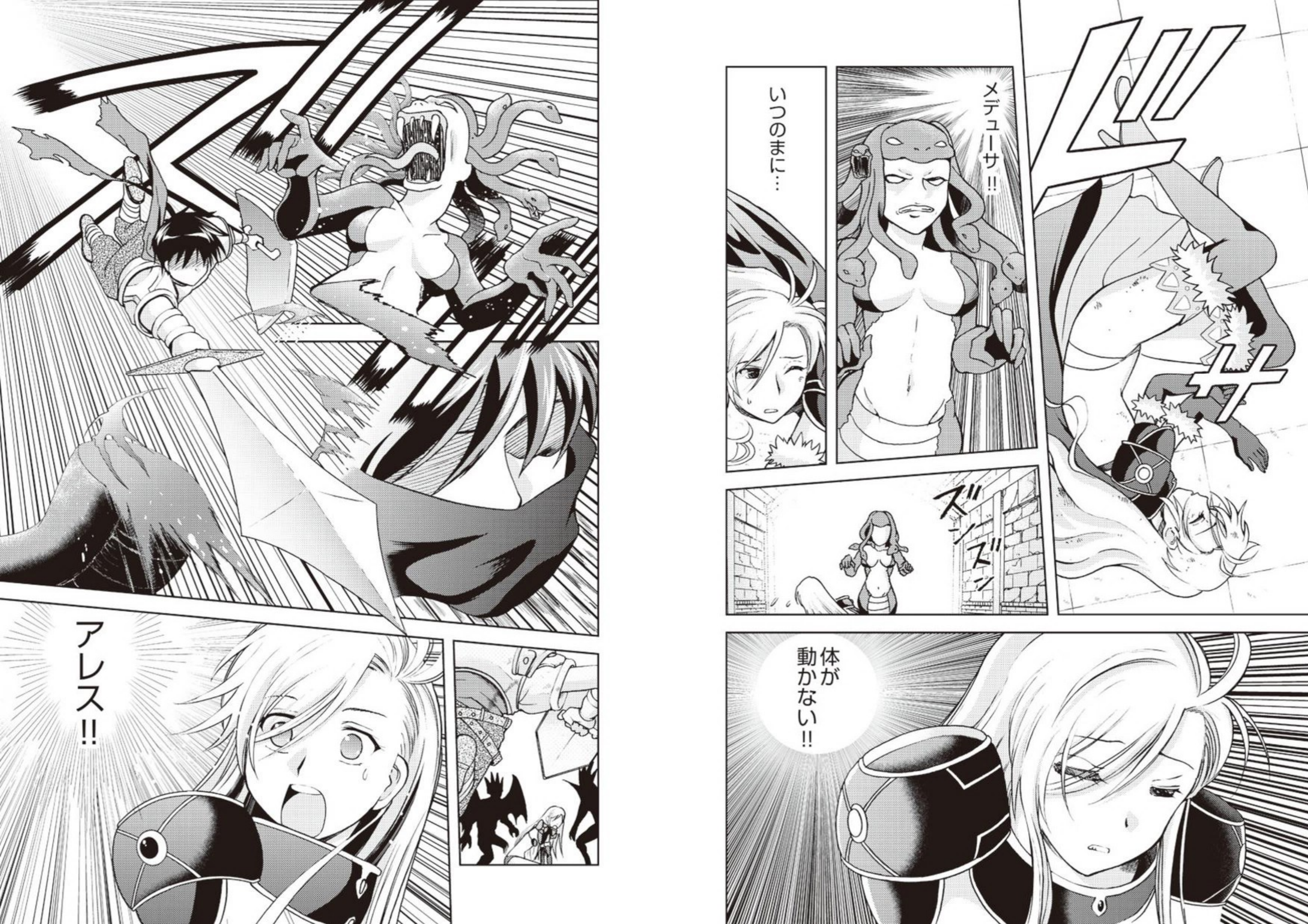

チャプ
師匠！
ハッ…
あんたが……
あれから五年
何度もチャンスはあったのに


好きなんじゃないの～～!?
ありえないからーー!!
…にしても…
奴に手紙書くのあきたな～～
どうやって倒そうか…
ブク ブク
そうだ!!


ここは奴が必ず戻ってくる場所
そして四方が穴だらけの一本道
つまりここを通るしかない
まず目の前の金塊に気づいてひきよせる
金
落とし穴に落下
そのスキに攻撃魔法を発動
とどめ!!
なさけない姿が目にうかぶわ!
今までワナにかかってきたけど今度はこっちの番ね
そして奴に手紙を書くのも終わりにしてやる
ギュ


ガーゴイル!!
くっ…


炎なら負けなくてよ!!
甘く見られたものね
キャア


メデューサ!!
いつのまに…
ズン ズン
体が動かない!!
アレス!!

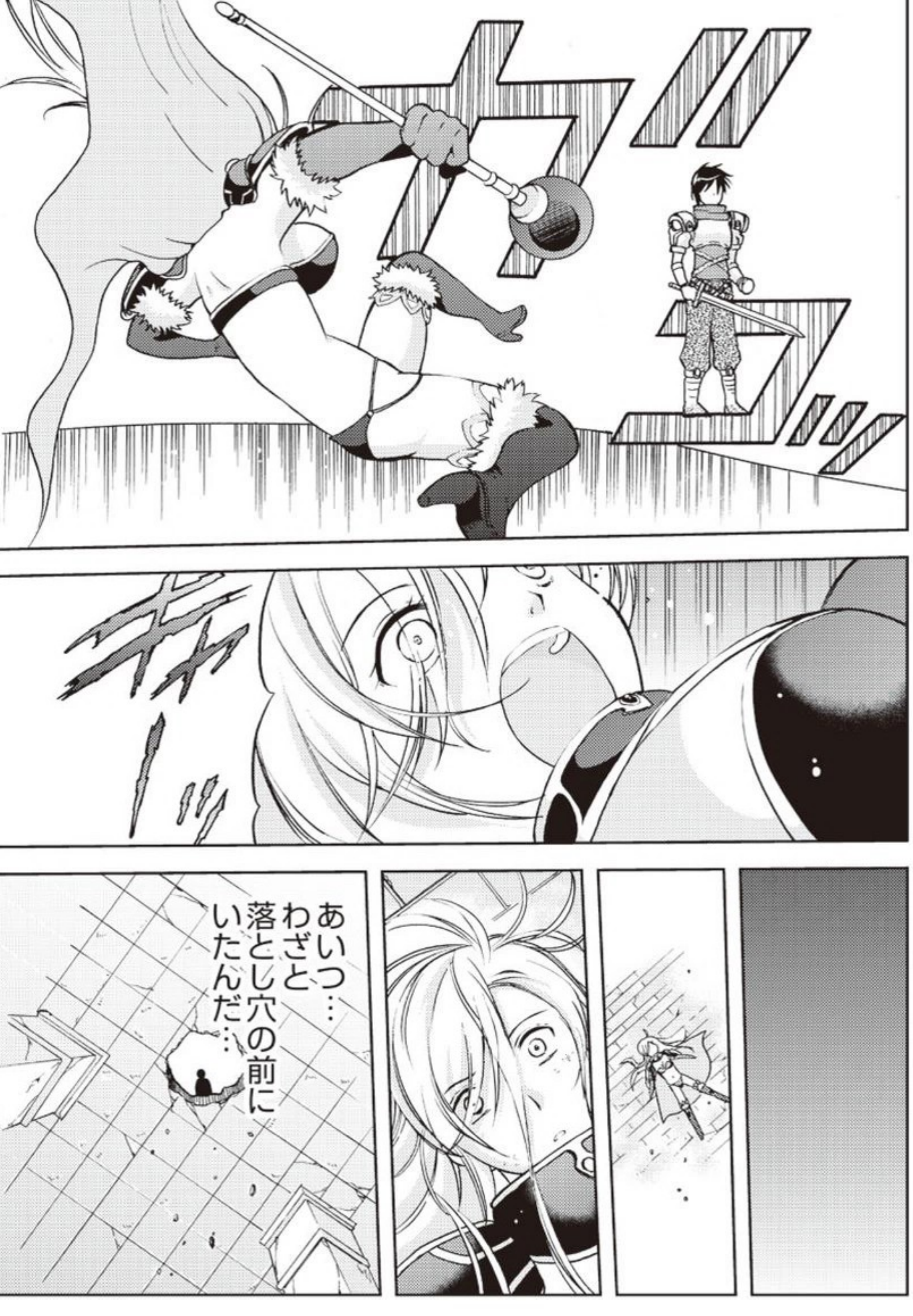

あ…


あいつ…
どんどん
強くなってる
ハッ
危な…


ドキ

あ…
……
な 何よ
それで恩を売ったつもり!?
私がピンチになるのを待ってたクセに!
この卑怯者!
私が苦労してるのはアレス! あんたのせいなんだからね!!


何とか言いなさいよ！
プイ
ムッ
カアァ
もう…絶対容赦しないんだから!!
ダッ！


あいつ…わざと落とし穴の前にいたんだ…



2011年10月からから好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第22回-第23回　ファルコムjdkバンド ちょうちょ

22、23回はアーティストをゲストに迎え、「音楽スペシャル」となった。ファルコムjdkバンドからは、ボーカルのイカルス渡辺さん、ギターの寺前甲さん、ベースの榎本敦さん、ドラムの岡島俊治さん、キーボードの上倉紀行さん、バイオリンの水谷美月さんが参加し、大所帯となったことで普段のブースの5倍以上広いスペースでの収録となった。OVA『空の軌跡』でエンディングテーマを歌ったちょうちょさんは緊張の中、ラジオ収録に参加。パーソナリティの小寺可南子さんと夢のデュエットを披露した。

▶第22回-第23回の舞台裏◀

23回の『空フィールド』で披露された、ちょうちょさんと小寺さんの『ハルモニア』の素晴らしいデュエット。これは一度リハーサルで軽く音合わせされていたものの、本番は一発録り！　jdkメンバーに「バカポンコツ天使」と呼ばれた小寺さんも、プロの面目躍如をみせた。

第24回-第25回　三木眞一郎（『零の軌跡Evolution』ランディ・オルランド役）

プチリニューアルし、ゲストコーナーは今夏発売予定のPSvita専用ソフトウェア『英雄伝説 零の軌跡 Evolution』に登場するキャスト陣から招かれることになった24回、25回。記念すべきリニューアル後第１回のゲストは、ファン待望のランディ・オルランド役の三木眞一郎さんとなった。三木さんは電話帳よりも分厚い台本となった『零えぼ』の収録を終えた直後ということで、自身が演じるランディ、そして『軌跡』シリーズについて、熱いトークを繰り広げていた。

▶第24回-第25回の舞台裏◀

リニューアル後も特務支援課見習いのふたりは引き続き登場ということで、一同胸を撫で下ろしつつ始まった24、25回。ラジオ内のコーナーや企画に関しては、まだまだリニューアルされていくかもしれないとのことで、今後の動きにも注目だ！



今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！





みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

天からの来訪者



絶望の目覚め



心当たり



拝啓 ファルコム様



過去 現在 そして未来



ネタバレ



ヨシュアの鏡



イメージ



赤毛仮面



最新の流行



赤毛引退



親子ゲンカ



フレイア様 今日の一言



狂気の仮面



零の軌跡 Evolution 情報課通信

THE LEGEND OF HEROES 零の軌跡 ゼロノキセキ エヴォリューション Evolution

零えぼの情報をいち早くお届け!



『英雄伝説 零の軌跡 Evolution』キャラアニ限定BOXの予約締め切り迫る！

今夏発売予定のPS vita専用ソフトウェア『英雄伝説 零の軌跡Evolution』。
その「キャラアニ限定BOX」版の予約締め切り日まであと少し。
今回は限定版の豪華５大特典のひとつである、
オリジナルドラマCDのイメージイラストが到着した。
イメージということは、エリィ、ティオ、キーアが仲良く
お風呂に入っているシーンが描かれる!?　期待は高まるばかりだ。

■製品情報

『英雄伝説 零の軌跡Evolution』
プラットフォーム：PlayStation®Vita
発売日：2012年8月予定
ジャンル：ストーリー RPG
CERO：審査予定
●価格：【PlayStation®Vitaカード版】6,090円（税込）
【ダウンロード】5,040円（税込）
発売：角川ゲームス
企画・制作：日本ファルコム、キャラアニ
開発：ピラミッド

【お知らせ】『ファルコムマガジン大賞を受賞したおのさんへのプレゼント企画が進行中！』日本ファルコムをして、「今までやったことがない」と言わしめるプレゼント企画が着々と進行中！　詳細は準備が整い次第、本誌にて発表予定なのでお楽しみに！

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

エステルのおっきなねんどろいどが登場！

『ねんどろいど　エステル・ブライト』



昨年行われたファルコムヒロイン総選挙で上位入賞し、見事ねんどろいどぷちになった『空の軌跡』の主人公・エステルが、7月にひと回り大きなねんどろいどになって発売されることが決定した！　武器の棒はもちろん、釣り竿やヨシュアのハーモニカといった小道具もばっちり完備で、エステルらしさを思う存分楽しめること間違いなし！　グッドスマイルカンパニーより7月25日発売予定。3500円（税込）

ラバーストラップ第2弾は『碧』らしさ全開！

『英雄伝説 碧の軌跡 ラバーストラップVol.2』



今年の1月から発売されているラバーストラップシリーズの第2弾が登場。今回はシャーリィや、銀の衣装を身に着けたリーシャ、『碧』で顔グラフィックがついた人気キャラクター・ミレイユなど、『碧の軌跡』らしさがてんこ盛りのラインナップになっているぞ！　宍喰屋より4月下旬発売予定。各630円（税込）

『零』『碧』で明かされた設定も盛り込んで『the 3rd』のスペコレが大幅パワーアップ!

『英雄伝説 空の軌跡 スペシャルコレクションブックII ～the 3rd編～ re-edit ver.』



2007年12月に発売された『英雄伝説 空の軌跡 スペシャルコレクションブックII～ the 3rd編～』が、『零の軌跡』『碧の軌跡』で明かされた真実を盛り込んだ完全版になって再登場！　人気キャラクター・レンをはじめとするキャラクターページを中心に、読み応えがパワーアップしたこの一冊を読みつくそう！　4月13日、新紀元社より発売。2100円（税込）。

『軌跡』シリーズの魅力が満載のアートブックが２冊同時に発売！

「英雄伝説 空・零・碧の軌跡 THE イラストレーションアートブック」
「英雄伝説 空・零・碧の軌跡 THE キャラクターアートブック」



『軌跡』シリーズのビジュアルをギュッと凝縮したアートブックが2冊同時に登場。『イラストレーションアートブック』は、イベントイラストやメカニックアートを中心に収録。『キャラクターアートブック』は、キャタクターを中心に収録した形になっているぞ。4月13日、ソフトバンク クリエイティブより発売。ともに3360円（税込）。

人生半キャラずらし



jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

MUSIC FROM DINOSAUR（ミュージック・フロム・ダイナソア）

みなさまこんにちは、jdkバンドドラマーのオカジです。

さてさて『人生半キャラずらし』第2回目はこちらの作品を紹介したいと思いますよ。ドドン！

『MUSIC FROM DINOSAUR』

実は僕が生まれて初めて買ったPCゲームは『ダイナソア』でした。それだけにこのゲームへの僕の思い入れは半端ありません。

当時小学校6年生だった僕は、なんとか両親をそそのかし、紆余曲折の果てにEPSON PC-386GEという98互換機のPCを手に入れました。そして丁度その頃、新作という形で発売されていたファルコムのソフトがPC98版のダイナソアだったのです。

近所のPCショップでダイナソアを買って来た日の事は今でも鮮烈に覚えています。

その日はとても寒くて、凍えながら、でもワクワクドキドキしながら、下ろし立てのPCを起動したっけ……。

このゲームの暗い世界観が、外の寒さと曇り空とに妙にマッチしていて、いつの間にかダイナソアの世界に引きずりこまれていたなあ。

ダイナソアは、今のファルコムの作風からは考えられないくらい、暗くて重くて難しくて、それでもクリアした後に、何か強烈な印象の残る不思議な感動作です。

そしてやっぱりファルコムの作品だけあって、音楽が素晴らしいのはいうまでもありません。開始直後の街で流れる『Mark My Words』は、いわゆる普通のRPGの平和な街でかかるようなBGMでは決してなく、主人公アッシュの重い人生を象徴するような、平穏の中に居ても決して安らぐ事のない漢(おとこ)の哀愁を感じる名曲だと思います。ショップで流れる『EXCITING SHOP』もファンキーでかっこいいんだなぁ。『ブランディッシュ』でもそうなんだけど、この頃のファルコムのお店BGMって妙にファンキーでオシャレでカッコよいのです。森で流れる『精霊の賛歌』の美しくも不可思議な世界を感じるメロディーは、何ループしても決して飽きる事はありませんでした。廃墟地下の『GOD！』もホラー映画系のサントラ好きな人ならビビッときちゃうんじゃないかなあ。この曲はイタリアンスプラッター映画のサントラっぽくて最高なのです。

そしてファルコム節炸裂のエンディングテーマ『風の紋章』はやっぱり外せない。いつかライブでやってみたい曲のひとつですね。いや、ライブでやるなら『戦いは悲しみの果てに』も捨てがたいか……！ ほかにも良い曲ばかりなので、ダイナソアをプレイしていない方もぜひ、こちらの『MUSIC FROM DINOSAUR』は聴いて頂きたいです。要チェックですぞ！

余談ですが、僕はこのゲーム、初回プレイから裏シナリオに進んでしまい、攻略本を買ってみたものの、一部のフラグ立てが分からず、ファルコムに攻略の問い合わせを往復ハガキで出した事を覚えています。投函からひと月ほど後に、丁寧な攻略方法と応援メッセージの添えられたハガキが届いた時は本当にうれしかったなぁ。感激しすぎて「絶対将来この会社に入る！」って思ったもんな（笑）

それではまた次回お会いしましょう！





岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤裕央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc











ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで世界50ヶ国に配信中。
（ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります）

発売中のコラム関連アルバム情報

［ダイナソア FM音源完全版］
価格：CD版…1,980円（税込2,079円）
iTunes配信価格…1,500円
収録曲数：33曲

※「ダイナソア」初版ゲームサントラ全曲をFM音源（PC-9801-86音源ボード）の演奏で完全新録音！



月刊FALCOM MAGAZINE Vol.14

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



安藤一次冷却水

「ザナドゥ・ネクスト」が大好きです。
いつまでも迷っていたくなる魅力的なマップの数々。
立体的な広がりを活かした奇岩城は、面白くて攻略していくのが勿体ないくらいでした。

『ザナドゥ・ネクスト』(2005)

『ザナドゥ』の発売20周年を記念して発売されたアクションRPG。聖剣ドラゴンスレイヤーを求めて旅をする一人の騎士と少女・シャルの物語を描いた重厚なストーリーは、多くのファンを魅了した。